●**「米子文学」56号**（鳥取県）

「米子文学」はこの号も充実している。**「悪食仲間」（野坂喜美）**は同人誌推薦が多かった作品で、チャボの生態などたいへんよく書けている。生活実感の裏づけが確かで読ませるが、チャボ以外の周辺の人間の生活が焦点を結んでいない恨みが残った。友人の急病と回復は近隣風景として許せるにしても、「ごちそう会」という仲間がよくわからない。農業をしている人々に都会の株への投資や、養豚業への融資や投資の話が絡む。それらとある意味でゲテモノ食いの仲間の関連が結ばれていない。都会の「金」によって蝕まれる農村生活の不快さをゲテモノ食いで象徴させようとしているようにも思えるが、それらはまったく関連なくただ並べているだけのようにも見える。それにチャボの生態がどう関連しているのか見えてこない。猪や狸や犬など「悪食」はたんなるうさばらしなのか、チャボが食われることが何を意味しているのか、その小説構造が、脆弱に見える。荒廃と頽廃の雰囲気は出ているものの、不満が残った。

むしろ動物を描くという点ではエッセイの**「チビ助の来ない夜」（佐藤多美子）**のほうが素直な感動を覚えた。片目が見えず、尻尾を失った傷だらけの野生狸が家に餌をもらいに来る話は、素朴ながら胸を打つものがある。「その身体で、ひとりぼっちで、今日までよくがんばったね」といういたわりの心と、何時間も軒下でびしょぬれになりながら餌を待っている狸のいたいけな姿とが交錯する。チビ助はまた下半身が麻痺し前足二本だけで生きている友だちの狸に餌を分けてやる。こうした共生と助け合いの心は人間の奥深くにある琴線をも震わせる。しかし野生の厳しさがそれらをまた蓋い、自然の中での死を想起させていくのだが、生きるということの厳しさとその命の姿をしっかりと掬い上げているところに、深い感動が残る。秀作エッセイだ。

「奈落の階段」（広田静子）は認知症の妻との生活を描いていて、その筆致は鋭く、悲劇をよく追い詰めているが、最後の部分を急ぎすぎた。階段から転落して介護者の夫が死ぬ結末は、事件としては解決していても、小説としては終わっていない。ここから何かを掬い取る作業までしないと、胸の奥に深くは入ってこない。途中までよく描けているだけに惜しまれる。

●**「仙台文学」74号**（宮城県）

「幻のブタ」（佐佐木邦子）も同人雑誌からの推薦のあった作品。メールに一種の伝達脅迫の「ブタ」が入っていて、それがクビと繋がる恐怖から、現在の職場の浮遊性を描いたOL・派遣人生ものだが、現代の一面を捉えているものの、しっかり腰が入っていないので、浮いている印象を否めない。この作者は次号に「氾濫」という農村を舞台にした長編を書いていてそちらのほうがはるかに力を備えている。こういう現代ものも書けるという力量を示しているにはちがいないが、書き手は自分に合ったフィールドにしっかり足をつけるべきで、時勢や周囲に合わせるようなポジションは捨てるべきである。

「蕪栗沼」（近江静雄）は雁の生息といういい素材を得ながら、歴史に深入りしすぎて、現在の足場を小説として失っている印象がある。もっと現在の雁の姿や自分自身に関連を深めて描きればいい作品になっただろう。せっかくの素材を殺してしまった。

●**「雪嶺文学」43号**（石川県）

この誌は様々な角度から多彩にアプローチを試みているのがいい。ある豊かさを醸し出している。今回も巻頭に**「高浜虚子の内灘来遊」（西尾雄次）**があり**「朱鷺・トキ」（松田正三）**という北陸ならではの貴重な連載エッセイもあって、ふっくらした文学空間を作っている。エッセイが全体によく、**「アリランの宴」（流章子）**もさりげない記憶でありながら深く心に残る。**「『2012』と『アバター』に見る世界観」（酒井恵三）**も、最先端の映画技術――CG（コンピューター・グラフィックス）に触れながら、その技術のすばらしさを率直に認めると同時に、背後に潜む世界観を摘出し、強烈な文明批評を摘出している視点はいい。映画を観ていない人にも観てみたくなるような魅力を備えていて、鋭い映画批評になっている。同人誌にはこういう現代に即した文章も必要と思う。

「キャッチャー・イン・ザ・ライブラリー」（吉村まど）は軽妙でリズムのある文体は読ませるが、そのおもしろさにやや流されて、重要なものを飛ばしてしまう危うさも付きまとう。連載なのでこれからどういう展開を見せるか楽しみではあるが、調子がよすぎる筆致がややひっかかる。「歪んだ鏡」は、基という陶芸家と主人公の「私」の恋愛にその基を支える「夫人」の三角関係が絡んで設定としてはおもしろいが、書き込みが足りないので、ストーリーの概略のような形で終わっているのが惜しい。一つの個性は感じるので、しっかり地に足をつけた描写や叙述力を身につけ、雰囲気をもっと濃く醸し出すことができるようになったらおもしろい世界が造形できるだろう。

●**「きなり」68号**（愛知県）

「水の行方は」（西垣みゆき）は文章も安定していて、牽引力もある。定年間近の夫婦の間を墓を軸に描いている筆致は味がある。子育ても終わり肉体の交わりも乏しくなって老い先を見つめる微妙な年齢の夫婦間の揺れはよく出ている。「リトル」というレストランのママなどもうまく配置されていて、男の心理も醸し出されている。ただ、何かもう一つインパクトがないのは、結局安全な日常のなかに戻り浸っていくからだろう。墓が切迫感がないのも、死を真に見つめ、自分たちの行く末にしっかり措定して生を問うその切実さが欠けているからだと思う。この年齢は一方では身体的にも癌が出たり、糖尿病が出たり、それまでの人生の蓄積が溢れ出てくる曲がり角の年齢でもある。否が応でも人生を振り返り、残りの時間を見直さざるをえない。その切迫感が置き去りにされているところに、彫りの浅さが出てしまっている。いい文章だけに惜しま

全国同人雑誌振興会

れる。タイトルも「水の行方」で十分で「は」はいらない。むしろ女性の視点から書いたほうが切実なものが出たかもしれない。

「施高塔路」（長澤奏子）は戦中の上海を描いた貴重な素材。門番のインド人や中国人、また太平洋戦争当初の上海の様子や、戦局が悪くなるにつれての周囲の変化など、体験者でなければ書けない記録性に富んでいる。内山書店が日本軍からどのように見られていたかなども出てきて、興味深い。敗戦で日本人がどのようにまとめられ、引き揚げ者として処理されたかも教えられることが多い。引き揚げ者が携帯できるのは一人千円と衣類三十キロだったという。当時は日本人は豪勢な家に住んでいる者が多かっただろうから、この没落は人生の浮沈を劇的に味わわせただろう。引き揚げ先は長崎だという。長崎が原爆で壊滅しているなどと夢にも思わないその落差を想起させるところで終わっているのもいい。筆者にとっては書き残さずにはいられない体験だったろう。読む者もしっかり受け止めなければならないものを呈示している。

「足助」（石川好子）は、昔風の「許婚（いいなづけ）」を中学時代に決められたことによる恋愛の苦悩と運命を素朴な筆致で描いている作品だが、庶民的な親しみやすい息遣いが立ち込めていて、それがこの時代の青春の息吹を匂わせている。タイトルは損をしている。外側はよく書けているが、恋愛の内面を彫り込んでその旋律を奏でればもっと陰影が濃くなっただろう。いつでも熱い思いを書けるだけの情熱を保持してもらいたい。

●**「海峡」20号**（愛媛県）

「海峡」は20号を重ねた、地味だが静かな落ち着きの感じられる誌である。

「知覧―六月三日の邂逅―」（西山慶尚）は、特攻隊の基地知覧で出会った特攻隊の生き残りの老人との顛末を書いた作品で、特攻隊を追懐する普通の筆ではなく、現在に至るまでの戦後の過程をも辿った小説的造形が感じられる。特攻隊についてはこれまで無数に書

かれてきたし、遺書もあり、特攻隊の生き残りの作家もいるので、いきなりそれらと比べることはできないが、戦後六〇年以上経って時間的隔たりのなかで当時を振り返り、戦後の変遷を辿る静かな筆致は、じんわりと訴えてくるものがある。こういう作品の前で感じられる戦後六〇年の時間の意味も一つの問いとして浮かび上がってくる点は成功している。特攻隊の生き残りが同僚の死をどう受け止めていくかという重い問いをずっと引き摺っていくように、またここにそれを追う主人公もその振り返りを余儀なくされる。同時にそれによって読者もあらためてそこに立たされる連鎖の生起にこの小説の価値がある。優秀作である。

●**「彩雲」3号**（静岡県）

「彩雲」は気鋭の士が集まっている誌。何かの残党のような雰囲気もある。興味深い誌だ。

「幻燈一夜」（寺本親平）には文体がある。「ですます」調でありながら、うねり膨らんで滔々と流れていく文章はただものではない。この文体で流していくのは様々な角度の深い思念が必要でその裏付けがなければこれだけの膨らみと流れは出てこない。この作品にはいっさい改行がなく、ひとつの想念のうねり踊る姿であることを全体としてもよく示している。ここには宇宙の素粒子「ニュートリノ」を持ってくるような先端の新しさも用いられていると同時に、物語の舞台が能として動いていく古典の幽玄の世界のしっかりした歴史時間も存在する。現代性と古典性の両方をこのように自然に取り込んでくる技量は一朝一夕の蓄積ではできないもので、息の長い文体の造形性の深さと豊かさがこの小説世界を強固に立脚させている。

物語もおもしろい。町長が作った五〇メートルの尖塔の上にある空中銭湯「天籟の湯」をめぐる話、ミミズの巨大オブジェのなかで繰り広げられる包帯娘の再生の話、この娘が病の皺の嘆きで詩を発するところもおもしろい。これがしかもパソコン記号の散りばめられた宇宙的な詩であるところも壮大である。娘の首から下の包帯を解き、その瘡蓋を一枚一枚苦痛とともに引き剥がす場面は一段と冴えている。苦痛を経たこの再生をある象徴と見る多重性も帯びて、それが能の古典性を借りて超時間の自然へと回帰しつつまた「天籟の湯」の天空の浮遊性へと戻ってくる筋立ては見事である。やや古典に依拠しすぎるきらいもあるが、こういう世界を提出できる作家はいない。優秀作であることは当然として、寺本親平というこの作家に注目したい。

「光る湖（うみ）」（鈴木孝之）は脳内出血で危機を迎えた主人公の物語。同じ企業戦士たちとの相対の中で自己を見つめながらリハビリに励むうち、さらに妻が交通事故に遭い、九死に一生を得る。人生の最大のピンチに大きな自然にすべてを委ねる気持ちのなかで未来に希

望と決意を託すストーリーは切迫感のなかにすがすがしいものがある。読後感のいい作品である。

●**「札幌文学」75号**（北海道）

創刊60周年記念号75号は三四四ページという記念号にふさわしいボリューム。ここまで継続するのは山あり谷ありでたいへんなことだったろう。一つの到達を賞賛したい。巻末の「札幌文学に足跡を残した全同人の氏名一覧」も、第1号からの編集後記の抜粋も、その変遷をよく記していて、足跡のわかる暖かい編集になっている。この暖かみが六〇年の継続の原動力となっているのだろう。編集人の田中和夫氏、また和気あいあいとした同人諸氏の御苦労の賜物に心から拍手を送りたい。

内容も力作ぞろい。巻頭の**「ひとりしずか」（小南武朗）**日本舞踊の舞台を素材にした好篇で、アヤという踊手の舞台で踊りに殉死する芸能の虚実の危うさを描いて読ませる。**「冬花火」（海邦智子）「気になる女」（峰田王子）**も佳く、**「悪戯（いたずら）な月」（池添しおり）**もおもしろい。児童の万引きの世界を扱った題材は興味深く、美月という女の子がよく書けている。**「省吾の手袋」（熊澤しずか）、「夢人への伝言」（金山道子）「永遠の春」（木宮節子）**など、どれも粒が揃った。出色は**「焼き場の風景」（小林和太）**で、戦中の子供の悪漢（ピカレスク）小説とも言うべき容赦ない生存の日常がよく描かれている。酷薄な現実を短い文章でナイフのように削り取っていく叙述は、冷徹なリアリズムを備えている。それが時にユーモアの色調を帯びて、逆にあるヒューマニズムを映じるのは、生きるということの力に満ちているからである。血を吐いて死ぬションコという脇役もいい。キコリに食われてしまうアイヌ犬のアツも、トントという人のよい女性もいい。全体に力強い素描でいいが、最後満州に渡り馬賊の頭になるという結末は安易でいただけない。この作品にふさわしい終わり方があるはずである。もう一つ、「焼き場の風景」というタイトルがしっくりこない。それは死体焼き場の描写に乏しいことや、全体の底に流れる主調を筆者が捉えきれていないからである。その二つの点が惜しまれる。

「咸臨丸、太平洋を往く」（石塚邦男）もおもしろかった。勝海舟の咸臨丸による日本初めての太平洋横断を手際よくまとめてある。これだけ調べる労力にも敬服するし、生き生きと当時を再生する手腕にも力を感じる。欲を言えば勝はアメリカから日本に何をもたらしたのか、内に宿ったことも後の坂本龍馬への影響や明治維新へのビジョンとして浮かび上がらせてほしかった。勝の中に宿ったものは、幕府体制以上の何か大きなものだったはずである。たまたま同じ筆者の**「大老の陰謀・天誅前夜」（コブタン）33号**）を読んだが、こちらもおもしろく、勝海舟のことはさらに詳しく書いてあって、啓発された。一気に読ませる把捉力は、これまでの時代小説とはちがった合理性が感じられる。**「ドン・キの忘もの」（須崎隆志）**や**「白い闇」（天川眞佐子）「毒の華」（緑川涼子）**など力の入った作品も多く、今号は記念号にふさわしい豊作号となっている。

●**「創造家（トリスメジスト）」17号**（岐阜県）

この誌は独特の視点を持っていて、歴史も含めた批判精神に富んでいる。

「極北と熱帯（或いは戦場）の文学『芸術のための芸術』の川村二郎氏と『人生のための芸術』の城山三郎氏」（高井泉）は、両者の文学の全体を捉えながら比較してそれぞれの個性を浮かび上がらせている。その手腕はわかりやすく納得できるものである。これは相当な量を読みこなして初めてできる論評であり、総体評とも言える抉り出し方は血の通った生かしていく批評で、どこかにあたたかみが感じられる。私も城山三郎の長編を読みたくなった。

創立30周年記念号でもあるこの号には編集後記に**「天座する同士たちよ　天の喇叭を吹いて祝ってくれ」（鳥巣召人）**という創刊からこれまでの略史が故人たちに呼びかけるように嘆じられていて、そのオリジナリティの源泉が覗いている。

今回の**優秀作**は、**「知覧―六月三日の邂逅―」（西山慶尚）**／「海峡」20号）、**「幻燈一夜」（寺本親平）**／「彩雲」3号）、エッセイの**「チビ助の来ない夜」（佐藤多美子）**／「米子文学」56号）の三作、準優秀作は、「水の行方は」（西垣みゆき／「きなり」68号）、「焼き場の風景」（小林和太／「札幌文学」75号）「咸臨丸、太平洋を往く」（石塚邦男／「札幌文学」75号）、評論の「極北と熱帯（或いは戦場）の文学『芸術のための芸術』の川村二郎氏と『人生のための芸術』の城山三郎氏」（高井泉／「創造家（トリスメジスト）」17号）である。

いよいよ第四回「まほろば賞」の候補作が出そろった。「あの日へ続く道」（林由加莉／「九州文学」529号）、「路上の鈴」（遠矢徹彦「風の森」10号）、「消罪の寺」（斎藤澄子／「飛行船」5号）、「もう一つのドア」（中山茅集子／「クレーン」31号）、「水槽の女」（こしばきこう／「ザイン」13号）、「ミッドナイト・コール」（和田信子／「南風」26号）、「知覧―六月三日の邂逅―」（西山慶尚／「海峡」20号）の七篇である。

この秋十月三十一日、徳島県三好市の富士正晴全国同人雑誌フェスティバルの第二日目午前九時よりこの中から公開選考会にて最優秀賞「まほろば賞」を決定する。同人雑誌諸氏には御参加を熱く期待したい。ぜひ自らの手で最優秀賞を選んでほしい。

（作家集団「塊」／五十嵐勉）

全国同人雑誌振興会